



札幌西支部

伊藤 貴雄

Takao Ito

本原稿について、「内容は、趣味でも仕事でも、家族のことでもなんでもかまいません」とのこと。会報の自己紹介文に書いた趣味は仕事…、仕事を語るには未熟です。家族のことはなんとなく書きにくい…。というわけで、日ごろから思っていることを。

公共交通機関を利用したときの席の譲り方についてです。

地下鉄やバスに乗っていると、ご年配の方や体の不自由な方、妊娠している女性など、いわゆる「専用席を必要とするお客様」が乗車されます。席を譲らなければならないというルールはないものの、そんな方々に席を譲らねばと湧き出る気持ち、それが人情です。譲るべきだという考えは一般的に常識と呼ばれます。ところが、わかっているもなかなかそれができない。人情や常識を多くの人が持っているものの、なかなか行動に移すことができない人もいます。伝える勇気がないのか、もしかすると恥ずかしいなんて気持ちがあるのかも。自分にも思い当たる節があります。一度譲ってはみたものの、断られてしまったことがあるのでそれから…なんて経験も理由の一つかもしれません。

そこで、少し「eひと」ぶって、私が実践している“断らせない席の譲り方”をご紹介します。

地下鉄で席に座っていると途中からお婆さん乗車、専用席は満席。

伊 藤「お婆さん、どうぞこの席に座ってください」

お婆さん「いえ～、大丈夫ですから…」

出ました、席譲ったときあるある。ここでめげてはいけません。

伊 藤「お婆さん、どの駅で降りますか？」

お婆さん「次の駅で降りますから…」

伊 藤「だったら座ってください。次の次の駅で降りるので、お婆さんが降りてから座れますから」

お婆さん「すみませんねえ、ありがとうございます」、お婆さん着席。

どうでしょう。仮にお婆さんの降車駅がずっと先の駅でも、お婆さんよりも先に降りるので座ってくださいと言うだけです。つまり理由はそれほど重要ではないということです。ちなみに、それでも座らないお婆さんには、今まで会ったことがないのでわかりませんが、「もう立ってしまったので座ってください」と笑顔で伝えます。ここまでくると人情でも常識でもありません、良心さえも薄れ気味。これを意地と呼びましょう。

「実際にやってみたらしつこいとお爺さんからお叱りを受けた」といったクレームは一切受けませんので、悪しからず。まずは優しくなお婆さんからお試しください。